1話

～ 駆け出し冒険者 と 新人サキュバス ～

お客様はここまでです♥
サキュバスのルームサービスでおもてな死!

リーナは机を拭く手を止めて溜息を吐いた。
「はぁ…」
「どうかしましたか、リーナ？」
「何か悩みごとか？」
「ルーセット…ノティア…
悩みっていうか、あたしがここに来てから
掃除とか薪拾うとか雑用ばっかじゃん？
そろそろあっちの方の仕事したいなーって」
「うーん…そうは言ってもねえ…」
「宿屋なんて水物ですし
何日も冒険者がこないのも
よくあるんですよ」
「ええーそうなのお？　がっくし…」
リーナが机に突っ伏すと同時に
入口の扉が開いた。
「ほらほら、お客さんですよ。仕事仕事」

入ってきたのはひとりの少年だった。
見たところ冒険者のようだが
装備には汚れや傷が見当たらず
いかにも駆け出しという風貌だ。

「いらっしゃいませ♪　お泊りですか？」

「ええと…はい」

「一名様でよろしいですか？」

「は、はい！」

「エッチなサービスはお付けしますか？」

「えっ？！　あの、その…」

「くすくす♪
あんまりからかっちゃダメよルーセット」

「じょ、冗談だったのか…はは…
こういうところに泊るの初めてだから
わかんなくって…」

「へぇ…そうなんですね…くすっ♪
それでは、ここにお名前お願いしまーす」

少年は顔を赤らめたまま、
慌ただしく宿帳に「ライト」と書き込んだ。

―冒険者を部屋に通した後。

「これはチャンスですよ」

「だね。さっきの子はどう見ても新米だったし仲間も連れてない」

「それに、女性にも免疫がなさそうでしたリーナの初仕事にピッタリのお相手です」

「うう…確かに強くなさそうだったけど…いざとなると緊張しちゃうな…」

「大丈夫大丈夫！部屋に結界張っておくから多少騒いでも他の客には気付かれないよ」

―夜

ライトはなかなか寝付かれずにいた。

明日から本格的なダンジョン攻略、生まれて初めての冒険が始まる。

準備は万端だった。

装備を整え、情報を仕入れ薬草を買えるだけ買った。

だが、自分を試すことへの不安と興奮が彼の眼を冴えさせていた。

と、その時だ。

――コンコン。

ドアがノックされた。

ドアを開けると、
雑用をしていた宿の娘が立っていた。
「ど、どうも…り、リーナです。
ルームサービスにまいりました」
「え、そんなの頼んでませんけど」
「えへへ…私の個人的なサービスですから…
ご遠慮なさらずに…ね♪」
リーナは猫のようにするりと部屋に入ると
ライトの手を優しく握り、微笑を浮かべた。
可愛らしい仕草と個人的なサービス
という言葉にライトはドキっとしてしまう。
「お客様は明日が初めての冒険ですよね」
「う、うん」
「初めてというのは誰でも不安なものです。
だから、私が少しでも不安な気持ちを
解きほぐしてあげたいんです…」
言いながらリーナはスカートを掴んで
スススス…とたくし上げていく。

柔らかそうな太ももが…可愛らしい下着が少しずつ露わになる。

『あ…その…』

ライトの視線はスカートの中身に釘付けだ。彼女が何を言わんとしているのか、考えるだけで顔が熱くなる。

『で、でも…お金、全然持ってないし…』

「でしたら私を恋人だと思って…可愛がってください…お代はいただきません。それでも、ダメですか？」

リーナの上目づかいの眼差しが男の劣情と支配欲を巧妙に刺激する。

「私と甘いひと時を過ごしてみませんか？」

『う、うん…そこまで言うなら…』

ススッ…

後はリーナに流されるままだった。
軽いキスや愛撫を交わしながら
服を脱がせ合い、
生まれたままの姿になった。

「リーナさん…と、とっても綺麗…」

ベッドの上で白い肌を晒すリーナの
艶めかしい肢体を見つめているだけで、
身体の芯がどんどん熱くなっていく。

「はぁ、はぁ…私のおまんこ…
お客様の逞しいおちんぽ欲しくて…
もう濡れちゃってます…」

股を開き、秘部を指で弄び
淫らな言葉を口にするリーナの姿は
発情した雌そのもの、
雑用をこなしていた
あどけない少女とはまるで別人だ。

「うう…エッチ過ぎるよぉ…」

「ほらぁ…早くきてくださぁい…私の身体で
沢山癒してあげますから…さぁ…♡」

誘惑されるがまま、
ライトはふらふらとリーナの元に
吸い寄せられていった。

「リ、リーナさん…」
ライトはリーナに覆い被さると細い腰を掴み
濡れた女の部分にいきり立ったソレを挿入した。
「ああんっ…お客様のおちんちん…とっても素敵です…♡」
ぬちゅ…♥
「うぅぅ…リーナさんのナカ、絡みついて…くあっ、き、気持ちいい…」
「いいんですよ…好きなように動いて私のおまんこ、ご自由にお使いください♡」
「ああっ…リーナさ…あれ？」

ライトの動きが止まる。
視界の端に奇妙なものが映ったからだ。
「え…リーナさん？
それ、翼？
し、尻尾もある…」
「あ！　変身解けちゃった！？」
「ま、まさか…サキュバス…
だ、だれか助け…ふああ…♡」
ライトはとっさに声を
上げようとしたが、
次の瞬間リーナの足が
腰に絡みついた。
性器が深く挿入され、
助けを求める声は半ばから
快楽の喘ぎに変わってしまう。

「駄目ですよお客様〜♡
他のお客様のご迷惑になりますから♡」

くすくすと笑い腰をくねらせるリーナ。
淫魔の名器がもたらす極上の快感に
ライトはあっという間に蕩けてしまう。

「しょんにゃあぁ…あうぅっ♡」

「お客様はもう逃げられないんです
私に…サキュバスに精を搾られる餌♡」

「ほらぁ…私のおまんこ」
気持ちいいですよね…
ヘコヘコ腰を振って
…人生最後の快楽を
お楽しみください♡」

「ああぁ…はっ、あっ…やだ、やらぁ…♡」

ワチュ

ワチュ…

「くすくす…ごめんなさいね、お客様…
本当なら明日からダンジョンに潜って、
経験を積んで、色んな人と出会って…
将来は一流の冒険者
だったかもしれないのに」
「あ、ああぁ…ダメなのにい…
き、きもちよしゅぎて…
こし、とまんにゃいよぉ…♡」
「そんなあったかもしれない素敵な未来ごと
お客様の命をいただけるなんて…
私も凄く嬉しいです♡」
クチュウ♥
クチュッ
クチュ
クチュ

『ああぁ…やらぁ…吸わないれぇ…
ああっ、あっ…あぁぁぁ〜♡』
『あぁ…お客様の熱いのが…
私のナカに入ってきます…♡
お客様も堪能してください♡
エナジードレインの、極上の快楽を♡』
ドクッ ドクッ ドクッ
『ああぁ…あ…あぁ…あ…』

激しい精の放出に伴い、ライトの身体から生命力が吸い上げられていく。

力が抜け、声が掠れ、視界に靄がかる。初めてでもわかる。死。命が吸い尽くされる。

けれどその根源的な恐怖すら魔性の快楽に溶けて、蕩けて…

トプン…

トプン…

「うっふふ…どんどん干からびていくのに幸せそうなお顔しちゃって…無様で可愛いですよ、お客様♡」

やがて、精の放出が終わった。
ライトはミイラのような
骨と皮だけの亡骸へと変わり果てていた。
サキュバスに精気を吸い尽くされた
愚かな冒険者の末路だ。
トロォ…
「くすくす…ご馳走様でした♡
これでお客様の未来も、命も…
全て私のモノです…くすくすくすくす♡」

やがて、精の放出が終わった。
ライトはミイラのような
骨と皮だけの亡骸へと変わり果てていた。
サキュバスに精気を吸い尽くされた
愚かな冒険者の末路だ。
トロォ…
「くすくす…ご馳走様でした♡
これでお客様の未来も、命も…
全て私のモノです…くすくすくす♡」

やがて、精の放出が終わった。
ライトはミイラのような
骨と皮だけの亡骸へと変わり果てていた。
サキュバスに精気を吸い尽くされた
愚かな冒険者の末路だ。
トロォ…
「くすくす…ご馳走様でした♡
これでお客様の未来も、命も…
全て私のモノです…くすくすくすくす♡」

「ノクティア、ルーセット！やったよ！初めて冒険者を始末できたよ！」

リーナは尻尾を犬のようにふりながら鼻息荒く二人の先輩に成果を報告した。

「よくできました…

と言いたいところですけど、精を吸う前に正体を悟られるなんて詰めが甘いですよ」

ルーセットは呆れたように溜息を吐いた。

「まあまあ、今夜が初めてなんだし、そんなガミガミ言わなくていいじゃん。よくやったリーナ。上出来よ」

そう言ってノクティアがリーナの頭を撫でた。

「ノクティアは甘いんですよ。まあ、十分役目は果たせましたからね。褒めてあげましょう」

ルーセットもリーナの頭を撫でる。

「うふふ、ありがとう二人とも」

身長が足りないルーセットが椅子の上で背伸びをして頭を撫でてくるのがおかしくて、リーナは思わず笑みをこぼした。